予科練平和記念館だより

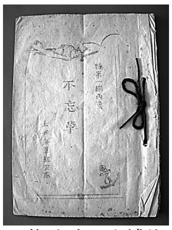
平成22年2月開館

予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください

（前号の続き…昭和２（１９２７）年、日本統治下の台湾で生まれた劉連輝（りゅうれんき）さんは、中学３年時に海軍へ入団。３０００人の海兵の中から劉さんを含む５０人が予科練習生として選抜され、訓練のため来日することになりました。）

台湾で選抜された５０人は、昭和19（１９４４）年11月初旬、高雄港から船で日本へ向けて出発しました。途中潜水艦に追いかけられたり、B29の攻撃にあったりしながら、10日近くかけて八幡（やはた）（現北九州市）に到着、鹿児島海軍航空隊にて朝鮮半島から選抜された50人とともに、特丙種第一期予科練習生に任命されて、七つボタンの制服を身につけることになりました。劉さんの日本名は中山禮男（ゆきお）。小学校の先生をしていたお兄さんがつけてくれた名前でした。

「…台湾から日本に来て予科練入って、体罰がなくなった。後で聞いた話ですけどね、軍部のほうから命令されたそうでして。植民地から初めてとった第一期の飛行予科練習生、大事にしなさいと言われたそうです。教官も班長も粒選びに選んだ人をまわしてくれた。だから教育は厳しいけど体罰は絶対にない。予科練は普通２年半ですけどね、僕たち２年半の計画で入隊したんですけれど、戦争が悪化してそういう余裕がなくて。すでにアメリカ軍が沖縄に上陸してましたから、その機動部隊がいっぱい来て鹿児島を爆撃した。僕なんかが勉強や訓練してた鹿児島航空隊、めちゃくちゃにやられました。めちゃくちゃに爆撃されて全部なくなっちゃったから、紫原（むらさきばる）（鹿児島市）というちょっと高いところにほら穴があってね、その穴の中で生活して教育を続けていた。３か月勉強して土浦に転隊した。僕たち転隊命令受けたときはね、まだ土浦は全然爆撃受けてないとき。そして鹿児島からカタコトカタコト汽車に乗って、土浦来るまで二晩、三日かかった。というのは、空襲が来ると汽車が全部ストップして、空襲終わるまでみんな逃げた。で、終わったらまた汽車に乗ってカタコトカタコト、空襲来たらまた逃げる。だから土浦来るまでに二晩、三日かかった。この間に土浦も空襲されて、残っている建物は少しだけでした。」



▲終戦時に土浦海軍航空隊で作成された台湾・朝鮮半島出身予科練習生と教官の寄せ書きの名簿

昭和20（１９４５）年６月10日、土浦海軍航空隊を目標とした大規模な空襲があり、予科練習生ばかりではなく、面会に訪れた人たちや付近の住民も巻き込んで多数の死傷者が出ました。しかし、劉さんたちは汽車が思うように進まなかったため、間一髪で被害を免れたのでした。

「…僕ら汽車に乗ってる間に爆撃したんだから。土浦に着いたのは爆撃して翌日か翌々日。土浦航空隊めちゃくちゃだったから、ほとんど教育らしい教育は受けてません。もちろん学科教育は受けましたよ。学科教育はね。それか爆撃後の後片付け。あれは少しやらされました。…僕なんか鹿児島にいたときはみんな灰だ。グラマン（アメリカ軍の戦闘機）がね、２００機ぐらいやってきて、やってきてやってきて、帰ってまたやってきて。順繰り順繰りにね。だからもう鹿児島はめちゃくちゃ。兵舎一つも残ってない。土浦来たときにはまだ兵舎残ってました。だから僕たち残った兵舎で寝泊りして終戦迎えました。」

●

――玉音放送はお聞きになったのですか？

「玉音放送はガーガーガーガーしていてあんまりわかりませんでした。でも、教官たちから終戦の玉音放送だということを聞いてね、確かにあの時みんなでね、涙流して泣きました。というのは、私たち、やっぱり自分が日本人だから。自分が戦争に負けたという気持ちで涙流しました。僕は小学校から中学校まで全部日本教育だから。自分が日本人であり、玉音放送は自分のお国の戦争が負けたという考え方が強い。だから涙流しました。これはやっぱり十何年受けてきた教育のおかげ。聞いてるときは涙流さなかった。ただその後に、教官からさっきの玉音放送はこれこれしかじかと説明されて始めて涙を流したんです。あぁ日本はやっぱり負けたんだ、ということをね。自分は台湾人であるということは全然意識してないから。日本人としての涙ですよ。自分が台湾人だったということはね、送り返されて台湾に上陸して、家に帰って、親から僕たちは台湾人になりましたと言われてはじめて『あ、そうですか。』という。別に心理的にそういう感覚はありませんよ。ただ言葉の『あ、そうですか。』それだけ。」（次号に続きます）